

第10章 拡大する教会における祈り⑥



祝福を祈る

啓示をいただく

いやしの確証をいただく



祝福を祈る

別れの祈りは時に難しいものです。パウロはその時、45キロもの道のりをもう一目だけとミレトまで会いに来てくれたエペソの長老たちに、励ましの言葉を終えたばかりでした。皆は二度と私の顔を見ることはないと言（使徒 20:25）、彼らはその可能性を覚えて悲しみに暮れていたのです（38 節）。「こう言い終わって、パウロはひざまずき、みなの方とともに祈った」（36 節）。 将来を最高の形で保証してくれるのは祈りです。何十キロも離れた心を一致させ、離れていても一つに結び合わせてくれる絆なのです。

別れには、物理的な距離によるものであれ、死別によるものであれ、一つの型があります。十字架上で亡くなる時にイエスがご自分の霊を父なる神に委ねられたように（ルカ 23:46 参照）、私たちがまた、信仰により、互いを神にお委ねするのです。民数記 6 章 24-26 節の祝福の祈りを、自分自身の言葉であれ、聖書の言葉のままであれ、祈るのもいいでしょう。「主があなたを祝福し、あなたを守られますように。主が御顔をあなたに照らし、あなたを恵まれますように。主が御顔をあなたに向け、あなたに平安を与えられますように」。

この「使徒の働き」の記事からは、祈りがあらゆる機会において秩序だったものであることが学べます。共に祈ることは、クリスチャンの家族の結びつきを固める絆です。愛する人々や親しい人々との別れの機会に祝福の祈りができるということは、一つの特権です。パウロの手紙でも、最後のあいさつは常に祝福の祈りを含むものであることに注目しましょう。

啓示をいただく



祈りはあらゆる場面にふさわしいものですが、危機的な時ほど緊急に求められます。百人隊長ユリウスの庇護のもと、囚人として海路、ローマに向かっていたパウロは、乗組員や他の乗客、他の囚人たちとともに生死の危機に直面します（使徒 27:1-20 参照）。これはパウロにとっては四度目の難破の体験でした（Ⅱコリント 11:25 に言及されているのはそれ以前の体験です）。

だれも長いこと食事をとらなかったが、そのときパウロが彼らの中に立って、こう言った。「皆さん。あなたがたは私の忠告を聞き入れて、クレテを出帆しなかったら、こんな危害や損失をこうむらなくて済んだのです。しかし、今、お勧めします。元気を出しなさい。あなたがたのうち、いのちを失う者はひとりもありません。失われるのは船だけです。昨夜、私の主で、私の仕えている神の御使いが、私の前に立って、こう言いました。『恐れてはいけません。パウロ。あなたは必ずカイザルの前に立ちます。そして、神はあなたと同船している人々をみな、あなたにお与えになったのです。』ですから、皆さん。元気を出しなさい。すべて私に告げられたとおりになると、私は神によって信じています。私たちは必ず、どこかの島に打ち上げられます。」（使徒 27:21-26）

嵐が命すら脅かすような悲惨な状況に際しては、普通の人なら絶望に負けてしまいます。しかしパウロは違いました。何も食べていなかったと書かれていることから、彼が命に関わる状況に際して、意図的に断食に入っただと考える人もあるかもしれませんが。しかしながら、注意深く見てみると、そのような理解にはほとんど根拠が無いことがわかります。ギリシア語の「アスィティア」という言葉は、「食欲不振」を意味する医学用語で、文字通りには「食べ物なしで」という意味です。すなわち、「人々が長期間、[著者注：食欲不振のために] 食べられなくなった後、パウロは彼らの前に立ち上がって言った」という意味なのです（27 章 9 節で言及されている「断食」はおそらく「贖罪の日」で、これはユダヤ人なら誰もが守っていたものでした）。

パウロが嵐の期間の最初の頃に食事をしていたかどうかはさておき、ここで容易に結論づけられるのは、彼が一連の出来事の中で、一貫して神との交わりを保っていたということです。彼がこの後について 大いに心配していたかどうかですが、彼は絶対にローマに到着できると確信していました（使徒 19:21、23:11 を参照）。クリスチャンの祈りは、その人の抱いている自信と確信とに左右されます。パウロが同乗の人々の安全のために祈っていたことはほぼ確かです。私たちの助言を拒んだあげく自ら困難を招き入れてしまうような人々のために祈ることは、容易なことではありません（27:9-11、21 参照）。しかし、祈る人々、神と交わる人々は、人から拒まれ、

助けを差し伸べてすげなくされても、さらに前進する勢いをいただくことができます。そして、パウロがそうであったように、祈る人々がそこにいることで、当初は彼らを拒んでいた人々にも祝福がもたらされるのです。サタンは私たちの海を荒れさせてくるかもしれません。しかし、信じる者の神は、嵐を鎮めたり、救出することができるのです。

パウロの祈りからもたらされたものは、明らかに差し迫った死を目前にしても大胆な、次のような宣言でした。「しかし、今、お勧めします。元気を出しなさい。あなたがたのうち、いのちを失う者はひとりもありません。失われるのは船だけです」(27:22)。これは決して、思い込みによる「積極的告白」ではなく、単なる希望的観測でもありませんでした。これは、神からの啓示に基づいた、事実の宣言だったのです。祈る人々はしばしば、超自然的な手段で物事がわかることがあります。これは、私たちがお仕えする神が全知の方であることを思えば、奇異に思うべきではありません。

パウロの祈りを通してもたらされたものは、①啓示と ②守りでした。天使による特別な啓示により、彼は目の苦境を超えた未来を理解することができました。また、神の介入により、同乗の人々とともに悲惨な破滅から守られたのでした。

ローマ途上でのパウロのこの体験も、いくつかの教訓を教えてくれるものとなっています。私たちは、嵐のただ中にあっても、不信仰による絶望を退け、神との交わりを保たなければなりません。神が昼に示してくださることは、夜に疑いを抱いてはなりません。本当に御声を聞いたなら、神がしようとしてくださっていることを、確信をもって宣言することができるのです。

いやしの確証をいただく



神のしもべたちには主の超自然的な臨在が伴うはずです。このことは、マルコの福音書にあらかじめ語られています。「蛇をもつかみ、たとえ毒を飲んでも決して害を受けず、また、病人に手を置けば病人はいやされます」(マルコ 16:18)。パウロは、イエスがそのように約束しておられたことを体験しました。マルタ島に着いてほどなく、彼は毒蛇に噛まれるのですが、無傷で事なきを得たのです(使徒 28:5)。彼はさらに、神がそのしもべを通していやしを行われるということを新たに確認しています。

たまたまポプリオの父が、熱病と下痢とで床に着いていた。そこでパウロは、その人のもとに行き、祈ってから、彼の上に手を置いて直してやった。(使徒 28:8)

ここでは、神の命令により福音のメッセージを携えて行くしもべを通し、超自然的ないやしがなされているわけですが、秘訣はどこにあるのでしょうか。いやしについてのこの簡潔な記述から、重要な要素が四つ見られます。パウロは ①行き、②祈り、③手を置いて、④いやした、というのです。

ポプリオは、パウロと同船者たちが、沈む船から逃れた後に足止めを食らったマルタ（メリタ）島の、最高位の役人でした。その父親が高熱と下痢で寝込んでいたというのです。パウロにとっては、どんな人の抱えている必要であっても、神のための機会なのでした。島の人々は既に、特別な歓迎の意を惜しげもなく示してくれていました。今度はパウロの番でした。彼はポプリオの父親のところへ赴きます（8節）。神のしもべはまた、善きサマリヤ人でもあるべきなのです。パウロは祈ります。病氣や苦しんでいる人々に対し、祈る以上に何か素晴らしいことができるのでしょうか。なるほど私たちは、彼らを楽な気持ちにさせようとするかもしれませんし、カウンセリングやケアを提供することもできます（どちらもすべきことです）。しかし、祈りほど素晴らしい働きはないということは、決して忘れないようにしましょう。なぜなら、それによって私たちは、神が介入してくださる扉を開くのであり、自分の伝える福音が信じるに足るものであることを示すことになるからです。

そのような場にあってはどのように祈るべきでしょうか。切なる課題を抱えるその人のために祈るのでしょうか。あるいは、神が与えてくださるものに対し、自分がその通り良き管となれるように祈るのでしょうか。おそらくはその両方です。人々と効果的な形で関わることをできるかどうかは、私たちが神と生きた関係にあるかどうかによって大きく支配されます。祈りは、人間的には不可能なことを神の現実へと変えてくださる方と私たちとを、同労者として結び合わせてくれるものなのです。

祈った後、パウロはポプリオの父親に手を置きました。神が私たちの上に油注ぎの御手を置いてくださらない限り、私たちが手を置いてできることはほとんどありません。パウロは、神の御手が自分の上に置かれているという確信が得られるまで祈りました。そして行動したのです。すると、その人はいやされました。明らかに、パウロ自身にいやしの力があつたわけではありません。今日の私たちも同様です。しかし、彼は神の代理人でした。その奇跡を行なったのは、まさに神の御手によることだったので（ルカ 11:20 参照）。私たちは神の大使であるべきです。神の推薦状を手し、その代理人として行動するのです。したがって、パウロがポプリオの父親に手を置いた時、それはあたかも神ご自身がされたかのごとくでした。結果はすぐに現れました。熱が下がりました。下痢が止まりました。父親はよくなりました。ところがそれだけではありませんでした。福音が広まり、他の人々までが来ていやされたのです（9節）。そして、疑う余地なくマルタ島には霊的な覚醒が起こり、少なからぬ結果がもたらされることになったのでした。

ポプリオの父親のいやしにおけるパウロの役割から学ぶことは、私たちは、超自然的な神によってしか満たされないような必要のある所にこそ赴くべきだ、ということです。まずは、神の御手とその導きが自分の上に置かれているということが感じられるまで、祈らなければなりません。それでこそ、病んだ人に、キリストの代理として振る舞っているという確信を持って手を置くことができるのです。

ただし、初代教会の祈りには、生活の必要が満たされますようにといった、私たちがしばしば祈り求める多くの物事についての言及が見られません。これは注目に値します。圧倒的に祈られているのは神の御国についてであり、その伝道と拡大についてなのです。派遣されたしもべたちは、主の教えをよく学んでいました。「だから、**神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます**」(マタイ 6:33)。祈りという手段を通して、私たちはまず、その御国を追い求めるのです。

学びのための問い

1. 祈りにおいて手を置くことの目的と価値は何でしょうか。
2. 必要とされている奇跡を求めて祈るより、神のみこころを知ることを求めて祈るほうが大切なのはなぜでしょうか。
3. 神の導きと指示を求めているなら継続的な祈りの生活が必要だというのはなぜでしょうか。
4. 悪霊の力に対する霊的な戦いで勝利を得たいならば、最も必要なものは何でしょうか。
5. パウロがマルタ島でポプリオの父親をいやしたと聖書が語るとき、それは何を意味しているのでしょうか。
6. 神がクリスチャンではない人の祈りに答えてくださるのは、どんな状況においてでしょうか。